

中国・四国地域の連携：バージョン1

司 会 樫 本 功 (広島大学経済学部教授)
発 言 者 深 野 和 夫 (山陰合同銀行会長)
岩 城 正 之 (日本開発銀行広島支店長)
和 氣 成 祥 (広島県豊田郡瀬戸田町長)
田 中 有 男 (いよぎん地域経済研究センター取締役社長)
助 言 者 糠 谷 真 平 (国土庁計画・調整局長)



1. はじめに

樫本：地域経済研究センターのセンター長を務めております樫本でございます。仕掛け人ということで討論の司会をさせていただきます。今回、先程の、糠谷局長さんのお話を賜わって、大変感銘を受けました。次の五全総にむけて当地方でもどうするかということを活発に議論しておるところでございますが、まさに担当の局長さんのお考えを承って、私共がこの地方でやっております五全総向けのいろいろな議論は、誤ってなかったなあというふうに思います。そこでただ今大変貴重なお話をベースにいたしまして、これから5時半まででございますが、皆様方にご討論をお願いしようと思っております。

できれば途中でフロアの方々のご意見を賜る時間があればと思っておりますが、ともあれ5時半ぴっちりには終わりたいと思いますので御協力のほどお願い申し上げます。

パネルの方々の御紹介ですが、もう御紹介するまでもない有名な方々ばかりでございますので、あえて省略をさせていただきます。今回のパネル討論会全体のテーマが中国・四国の連携でございます。バージョン^{ワン}1といたしましたのは今回で全ての話が^ツつまる訳でもないということで、次々バージョン^{スリー}2だとか3だとかということになるかと思うからです。



榎本 功氏

私の問題提起でございますけれども、私共、地方におります者にとりまして、一番重要なのはわが国全体の発展であります。それがまた世界に対する貢献でもあろうかと思ひます。地域エゴで、自分が住んでるからこう何とかしたいとゆうのではあまりにも話が小さすぎます。少なくともわが国全体の発展、そのわが国全体の発展のためには、中央が、東海道筋も含めまして発展を見なきゃいけませんけれども、そうはいいいながら地方の発展もあってこそ、わが国全体の発展あるんだらうというふうに思ひます。四全総の時に、多少なりとも私共の反省といたしましては、この地域ではナショナルレベルのいろんな国土政策上での話であるとか、プロジェクトをあまり出さなかった。従って中央の方で四全総でつまみ食いしようとしてもするようなものもなかったということもございまして、ぜひとも次回の五全総には、当地方から有益な意見を申し上げて国のレベルから言っても、うん、そりゃあやはり日本全体の為に必要だという御認識を得て五全総にのっけていただければなというふうに思う訳でございます。

もちろん中国地方だけ、あるいは四国だけといいましてこれは小さなもんでございますから、中国と四国を一体で考えなければならぬ。そうはいっても中国及び四国を一体的に何か考えるといっても全部の地域を全て包含するような国土構造上、或いは大プロジェクトというのなかなか考えにくいことです。これができれば一番よろしゅうございます。よろしゅうございますが、そうは言っても、いろんな顔をそれぞれの地域が持っておりますので、全部まとめるのはなかなか難しい。そうとすればですね、セカンドベストとして、それぞれ広域的な視野を持ちながらもいくつかのプロジェクトが重なりあうということになるのかなあというふうに思ひます。そこで、それぞれの地域を考えなきゃいかん訳ですが、そうは言ってもナショナルレベルの話をしようとしているのでありますから、広島県内だけだとか岡山県だけだとか島根県だけだとかいうんでは、これは榎谷局長さんの講論の中にも入らない訳でございますので、少なくとも複数の県、或いは地方にまたがるようなものが出てくるとおもしろいというふうに思ひます。

中国・四国の連携ということになりますと、本日は四国の方からお見えいただいておりますので、南の方から順番に御意見を賜ろうと思っております。まず、順番が御座

席の反対側になりますが、田中さん、いよぎんの地域経済研究センターの社長様でございますが、四国の中で民間シンクタンクとして非常に大きな、建設的なプロジェクトをご提案なさってるところでございますので、是非、四国の側から中国・四国の連携をどんな風にお考えになるのか、そのへんからお話を賜りたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

2. 中四国地方の交流と連携

田中：御紹介いただきました、いよぎん地域経済研究センターの田中でございます。

今日は榎本先生のおかげで、こうやって四国の側からお話をさせていただく場所を御提供いただきまして本当に感謝いたしております。先程もちょっとお話しておりましたのですが中、四国ということが、何のためらいもなく、この数年言われるようになって参りましたですね。その背景には随分大きな変化がある訳でして、いよいよ、今治と尾道を結ぶ今尾ルートが、あと5年経ちますと貫通する訳なんです。それから先程もお話しておりましたが、松江と三次が結ばれて、そして広島が結ばれるというようなことが、もうすぐ目の前に来ている訳です。戦後よく言われましたけれども夢みtainなことを言っておりましたのが本当に、陰洋時代、山陰と瀬戸内海と太平洋、陰洋の時代が、いよいよ目前に来たと、こういう時期にあると思うんですね。こういうことでありまして、本当に中・四国という言葉が自然に出てくるような時代になったと思うのですが、私もこちらに参ります前に、中・四国は今どうなってるのと、いろんな立場の方にお伺いしてみますと、割と元気のいい声が出てこないんですね。まあ、隣同士だけれど案外関係ないとか、あまり交流がないとか、細々と交流はしてるのかというようなですね、私は期待としてはですね、中・四国はもっとあつあつであってほしいと思ったわけですが、現実にはそうでもない。で、これは一体、どうなっておるのかと思って、またいろいろ調べてみますと、どうも皆さんおっしゃってることと少し違って面もあるんですね。

例えば、私は今朝、高浜から水中翼船で宇品まで参りましたけれどもあの栈橋で待っておりまして、待ちきれない程、人が降りて来るんですね。今朝のは121人乗りだったと思いますけれども、それぐらいお客さんが多いですね。それからもう一つご報告したいことがあります。この間私、今治から対岸の大島行のフェリーに参りました。今治―大島間は今治尾道ルート最後の橋、来島大橋を工事中のところですが、そのフェリーは25分おきに、ひっきりなしに行ってるんですけれども、いっぱいなんですね。積み残しができる状態。で、先程、瀬戸田町長さんにお伺いしたら、私が感じたことと全く同じことをごさいます、今ですね、今治―尾道の橋は完成していないんですけども、観



田中 有男 氏

光バスとか、交流の車が非常に多いんですね。そういう訳で堀江一仁方というのはなくなったんですが、今、堀江一阿賀といいまして、広と呉との間に阿賀港というのがありますね。松山の堀江港から阿賀港を結んでるフェリーがあるんですけども、これも調べてみますと、大変混雑しておりますね。だいたい一時間おきに走ってるんですけども、大変繁昌してるということを考えてみますと、皆様が口でおっしゃってる以上に、やはり、この広島と愛媛、そして中国と四国というのは、いろんな意味で、密接な交流が始まっているということを私感じてる訳でございます。先程、局長さんのお話がありましたけれども、本当に、この瀬戸内海に、三本の橋をかけて、その最後の橋がいよいよ2年間で開通するわけです。その三本の橋をかけてですね、何の効果もないとか、大したことなかったなんか言われたんじゃないかという感じがありません。この三本の橋がかかれば、関西とか中国とか四国とか九州というところが変わらざるを得ないし、変わっていくのが当然であります。今、四国でも、去年、高松と高知とが高速道路で結ばれました。で、いよいよ、あと一年ちょっとで、松山と高知、そして松山と高松も、約2時間ずつぐらいで結ばれるような時期になって参りました。四国の高速道路もずい分、遅れておりましたけれども、いよいよ今治尾道ルート開通を前に広がってきたというのが実状なんですね。という訳でございますが私は、何と言いましても、四国の発展とか、愛媛県の発展ということだけではなくて、やはりこの瀬戸内海を囲む、各県の経済が、お互いによくなっていくということが本当に大事なことだと思いますし、又、そういう時期が来たと思っております。かつて何百年か前は瀬戸内海を中心に日本は発展した訳なんですけど、いよいよその日が又、再びやって来たというような感じがいたしておる訳でございます。

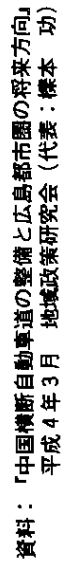
口でそういうふうにくら言いましても、先程のように大したことない、いつまでたってもそう大きなパイプにはならないという御意見もありますので、いろんな方のお話を伺っておりましたら、大変いいお話がございました。松山は御承知のように、コンベンション都市として世界に売り出そうということで、コンベンションビューローが、一昨年出来た訳でございますが、たまたまコンベンションの方々のお話を伺っておりますと、松山だけでなくて広島コンベンションビューローの方と松山とがお互いに提携して、松山にないものは広島、広島にないものは松山というような形で、世界の学術会議とか見本市とかいろんな学会とかいうものを誘致運動していく、共同PRといいますかね、そういうことをすでに始めておられるということを知りました。これは、私は、1つのお手本になるんじゃないかと思うんですね。松山は松山だけのこと、松山で会議があったら、もう広島のことには知らない、そんなじゃなくてですね、松山で会議があったらあと広島、そして、その向こうにはカニの美味しい松江がありますよとかいうような、そういうやはり連繋プレーといいますけど、共同PRというか、そういうことがこれからどうしても必要になってくるということを強く感じて居る訳でございます。そういうことから考えていきますと、コンベンションさんだけでなくてですね観光面でも

経済面でもいろんなことができる訳でございます。長い歴史をたどってみますと、この広島と愛媛ということだけをとってみましても、本当に私達、小さい時から安芸の宮島に来たとか、呉の軍港を見に行ったり江田島に行ったりとかいろんな思い出があるんですね。そういう意味からも、私は絶対にこれから交流を続けて行く必要があると考えておる訳でございます。

3. 安芸・防予Qルート構想

田中：たまたま樺本先生がすごいことを御提唱しておられます。樺本先生は、この何年も前からいろんなすばらしい御提案をなさっておられますが、今回、この安芸-防予^{ぼうよ}Qルート、みなさんにお配りしておるようでございますが、すごい構想を御提案なされておる訳でございます。私も、かねがね漠然と、何かこの辺りが一緒になったらいいなあと思っておりましたけれども、これだけ明確にQラインという形でお示しいただけますと本当にすばらしい御提案であると思います。何と言いましても、このQラインの周辺に住んでおられる方々の人口というのは大変な人口でございます。特にその中には、先生のお話では、島が九つあるそうでございますが、その九つの島をもじってQラインと、なかなかまあ、すごいことをお考えになったものだと思います。そういう意味でも、このQラインというのは、これからの交流の輪といいますか、そういうものを非常にシンボリックにネーミングなさっておられるのではないかと思います。また、先程、局長さんがおっしゃいましたように、第2国土軸ということ、後で時間がありましたら申し上げますけれども、第2国土軸構想というものを、さらに生かし深めていくためにも、このQラインというのが非常に大きな意味あいを持ってくるんじゃないかというふうに考えておる訳でございます。まあ、そんな訳で、今までは、何となく漠然とですね、中四国が提携していかないと大変だ、関西空港は出来るし、福岡の方はだんだんよくなっていくし、その中でとり残されると大変なことになるなあというような気持ちはあったと思うんですが、さて、具体的なことになるんですね、何から手をつけていいか分からないというような状況だったような気がいたしますのでございますけれども、冒頭に申し上げましたように、いよいよ、この陰洋の時代、私はいつも申し上げておるんですけれども、世界中でですね、冬にこちらの山でスキーができて、こちらの山でゴルフができるのはですね、これは中四国以外ございません。まあ札幌はいくら立派でも冬はゴルフ出来ません。札幌の方がおられたら大変申し訳ないんですが、札幌では半年間はゴルフはクローズなんですね。そういう訳で、私達は釣りをしようと思ったら釣りができるし、本当に人間が欲しいものは皆この瀬戸内海、そしてこの中四国にあるような気がいたしております。そういうものを、私達は、自分達が評価していないだけで、我々がもっと評価していければ、もっともっと魅力的な経済圏となり、地方が育っていくのではないかという気がいたしておる訳でございます。先程の局長さんのお話しにもありましたけれども、本当にこれから、豊かな生活をしてそして子育てが出来る

広島市



のはですね、私はやはり地方だと思いますね。地方で本当にいい生活をして、そして子育てをやっていくということが人間にとって一番幸せなことではないかと思います。まあそういう意味でも決してオーバーではなくて、いよいよ中四国の時代が来た、瀬戸内海の時代が来たというようなことではないかと思いますが。とりあえず以上のようなことで。

樫本：はい、ありがとうございます。お褒めいただきましたので調子にのってご説明を申し上げます。お手元に、あるいはこういう話題がでるかなと思って、お配りしてございますが、一枚の地図がございます。今、お話がございましたように、あの山口県の東側というのは、どうもかつて岩国の市長さんがおっしゃったとかいう話で私が直接聞いたんじゃあございませんけれども、岩国の市長さんがおっしゃるのに、山口県庁は、岩国市を、ありゃあ広島県岩国市だと言う。広島県庁は、あれは山口県岩国市だと言うってんで、だいぶお嘆きになったというお話を承ったんでございますが、どうも山口県の東部地域は、山口県庁が西にあるものですから、あまり御考慮ないのかな、事実上広島と非常に関係のあるところでございます。山口の東部ですね。で、柳井だとか大島だとか、大島の先っちょに、情島という島がございます。これは大島の中の東和町の一部でございます。これで山口県が2島ございます。そこから津和地から、怒和島、中島、睦月、興居島、5つの島がございます。これは愛媛県でございます。それから広島県側から言えば、倉橋まで道路が通っておりますが、鹿島、それから、点線のところはちょっと長いから、海底トンネルかなと思うんですが、全部で九つの島がございます。九島ございますんでQルートということにもなります。この点線のところ、海底トンネルというのは難しいだろうと思ったら、ゼネコンさんの部長さんにお聞きしたら、沈埋トンネルというものもある。これは箱を並べりゃいいんだそうでございます、こんな技術は“ちんまい”話だという話でございます。そしたら広島の地域社会研究センターの斎藤さんが、その話はおもしろい。そんなら箱を樹脂かなんかでつくって上が見えるようにしたら、サメが通って行くのが見えるじゃあないかと、サメが通るのを見ながら運転して松山道後でお風呂に入るっていうのはいいじゃないかという話になりました。まあ上を見ながら運転したら危ないから、海底にドームかなんかを樹脂で作りましてドームの中から上を見たら魚が泳いでおる。車は陸の駐車場に置きましてシャトルバスかなんかで行けば、瀬戸内自然水族館みたいでいいじゃないかってなことを、私共、技術の分からん者は言ってるわけでございます。

4. 広島広域圏の形成と南北軸の強化

樫本：いずれにしても四国最大の都市は松山でございますし、中国最大の都市は広島です。最大の都市同士を結ばないで中国四国の連携を言ってみてもしょうがないんじゃないかということでございます。もちろん、これを強調するためにそのルートしか

書いておりませんが、周辺をちょこっと入れますと、3百万の人口がある。広島県の人口ぐらいあるわけでございます。こういうのをおっかなびっくり御提唱申し上げたら、みなさんおもしろいとおっしゃって下さる方が多いもんですから、つい調子に乗って申し上げてるところでございます。

もちろんこれに加えて広島市と松江を結ぶことが大切だと思っています。私は二山二松、二つの山と二つの松でございますが、二山二松が広島から言うと大切だと思います。二山というのは徳山と福山ですね、東西でいえば徳山と福山です。徳山が博多の方を向いたり、福山が岡山の方を向いてもらったんじゃあ、どうも広島も将来ないんじゃないかと思っています。それから二松の方は一つは松江ですね、ですから松江―三次間のルートが重要で、これができれば、広島と松江は将来2時間で結ばれる。それからもう一つ南の松山ですね。松江と松山を南北に結ぶ二松が大事です。二山二松ということで、広島はお隣り同士で仲良くしなきゃいかんところであると思っています。

そういうことで、こういう案は、先程の糠谷局長さんの南北の一つのルートにあたるのかなと思います。南北ルートには米子から落合に行って落合から岡山へ行くルート、瀬戸大橋コースってのがあるんですが、米子から落合へ下りて見えた方が岡山へ行くかなあ、それよりも大阪へ行くんじゃないでしょうかね。ですから私は米子から岡山へ行くルートは、陰陽分断自動車道と名付けております。分断があれば、早急に縫い合わせなきゃいけません。松江と三次の間を結びますと、松江と広島が2時間で結ばれます。これは陰陽縫合自動車道と名付けておりますが、それがこのQルートにぶつかって、さらに松山から高知へ行く、というんで、先程の糠谷局長さんの御意見にぴたっと合うんじゃないのかなと、南北を連絡するという意味では非常に重要であると考えております。先程の瀬戸大橋を通るルートは、第2の都市同士を結んでおりますし、陰陽分断自動車道でございますが、これはまた、それはそれなりに重要視しなきゃいけませんけれども、それだけではどうも南北の連繋は出来ないんじゃないかなというふうに思っておるところでございます。

まあ、どうも、この話ばかりではおもしろくございませんので、次に、和氣町長さんです。和氣町長さんは改めて御紹介するまでもなく、瀬戸田町の方には申し訳ありませんが、瀬戸田町長でおられるのは、本当にもったいない方でございます、できれば次の広島市長さんぐらいに立候補して下さらんかなと思っておる方でございます。和氣町長さん、よろしくお願い致します。

5. 瀬戸内海の再評価と整備

和氣：ただ今、御紹介いただきました、瀬戸田町の町長の和氣でございます。実は、樺本先生からこの会へ出席するようにということで、つい、気軽に、はい、承知しましたと申し上げたんですけれども、今日はそのメンバーを見ますといささかたじろいしております。大学の先生か、地域計画の専門家ばかりでございます、私共のような小さな町で経験をし、ものを考えておることが、こういう広域の場にとっても通用するとは思えませんのでいささかたじろいでおるところでございますが。まあ、しかし、大きな地域も小さな地域の集合体でありますので、その小さな地域が何を考え、何をしておるかということも多少は参考になるかなといったような気持ちで話をさせていただきたいと思っております。



和氣 成祥 氏

最近、先程、田中社長がおっしゃいましたように、中四国という言葉がひんばんに出て来ます。先程も控室で糠谷局長さんに中四国というのはいつごろ出て来た言葉でしょうかというふうに申し上げたわけでございますけれども、ずい分と中四国という言葉が耳馴れてきております。ところがなかなか実体がないというところにお互いの悩みがある訳であります、実はその、悩みの解決は瀬戸内海ではないかというふうに思っております。先般も、松山で中経連と四経連のシンポジウムに私も出席をさせていただきました、皆様方の議論をいろいろお聞かせ願ってございました。ところが、ともすると向こうとこちら側という発想の発言なんですね。向こうとこっちではいつまでたっても連携は難しいのではないのかと。向こうとこちらという意識をつくっているのは実は瀬戸内海である訳なんですけれども、かつて瀬戸内海というのは中国瀬戸内海沿岸、四国瀬戸内海沿岸をいっしょにひっくるめて日本をむしろ支配をした程の地域であったんです。瀬戸内海の争奪をめぐるって国の覇権をかけたといったような歴史もたくさんある訳でありまして、かつては、少なくとも沿岸部分については、瀬戸内海と両岸は一体であったはずだと思う訳です。ところが、最近の交通体系の変化で主力が陸上の方に移った為に、瀬戸内海というのは四国と中国を隔てる海という見方が定着をして参った訳です。まあ、そんなようなところから、意識として瀬戸内海の向こうとこちらと、こういうことになっておるんだろうと思うんですけど、私はこれから中国、四国を考える時に、お互いの側に立って向こう側を見るのではなく、私はこの種の集会はぜひ、瀬戸内海でおやりになったらいかがですか、右を見たら中国地区、左を見たら四国地区と、等間隔で両岸を見る癖が必要じゃあなかろうかというような感じが実はいたしております。

先程、糠谷局長さんの方から、国土軸とか、あるいは輪切り状の地域軸のお話がありました。幸いなことに両本土におきまして、高速道路もどんどん整備をされておま

すし、連絡をする道路も着々と整備をされております。その上、瀬戸内海には三本の橋が架かるということで、物理的に形の上では、中国と四国は連絡を間もなくする、或いは部分的にはしたと見ていいと思うわけですが、問題は、その両方の地域が一緒になる場合には、これはやはり、あくまでも連絡でなしに連繋でなければならないんだらうというふうに思います。それは意識の上でもそうでありまして、生活実体、経済実体の中でも、ただ単なる連絡でなしに連繋の実があがるということによってはじめて、この二つの地域がお互いに補完をし合って大きな力をつくっていくのではないかというふうに思います。そういった意味の中で、私は、瀬戸内海が占める位置というのは非常に大きいというふうに思います。先程局長さんのお話の中に、五全総を考える場合の一つの主要テーマといたしまして、もう都会地では求められなくなった豊かな空間をニーズとして持ってくるというお話がございましたが、私はまさにこの瀬戸内海を中心と致しましてこの中国というのは、これから国民のニーズに応えられる日本で最大の地域であるというふうに考えておるわけです。多様な文化と多様な自然を持っておりますので、こうしたものが一つの圏域で可能だというのは世界でも類例がないのではないかというふうな感じがいたしております。従いまして、私は瀬戸内海を中心と致します国際化というのも意外に早く来るだろうというふうに考えておまして、私共、瀬戸内海に住む人間といたしましては常にそのことを視野に置いて地域づくりをやらなければならないという使命を感じておる訳であります。

そこで、島から見まして、本土の都市なんですけれども、私はこれは国際化という時代を迎える、むしろ現在の日本の発展の中でもそうでありまして、国際化を迎えるということになりますと、本土側の都市というのはやはりしっかり都市機能を集積していただく、そういうことによって周囲のものが機能する、周囲の地域が機能するということになりますので、私は、中核都市は、都市機能をしっかりつくっていただくということが大事だというふうに思います。それから、農村、島におきましては、高齢化、過疎が進んでおります。確かに定住人口というのは遺憾ながら、なかなか増やそうと思っても、増やす手立てに困惑をしておるのが実態でございます。そこで、これも局長さんのお話にありましたように、交流人口でこれをまかなうということが非常に大事でありまして、特に、私の町では交流ということを非常に大事に致しておりますけれども、交流することによりまして、新しい知識や情報、あるいは技術、こういったものがどんどん地域に集積をされてきますので、これから地方が豊かな交流の場になることによって集積された都市とのアプローチさえきちっと出来るならば、私は、その、山間地と言えども或いは島嶼部と言えども新しい時代の中でそれなりの役割をあるいはむしろリードすることのできるような立場にさえなれるのではないかというふうに思っておる訳でございます。そういった意味で、社会条件がどんどん、今、整備をされる中で、瀬戸内海をどう生かしていくのかというのが大きなテーマになると思いますよ。私は是非、五全総の中でソフトを含めてこれは位置づけてもらいたいなあとというふうに思っております。フランス

では、南仏のリゾート開発をするのに、国が龐大な土地を買い上げてそこにリゾート開発をされたそうではありますが、この瀬戸内海や太平洋や日本海の海というのは何もお金を出さなくても有る訳でありますので、国の方もソフトを含めまして、今までのような過熱気味のリゾート開発では困りますけれども、地域づくりの一貫としてのリゾートにはそれなりの手法があると思いますので、地方自治体がそういうものに取り組めるような整備を、是非お願いをしたいなと、そうすることによって瀬戸内海が飛躍的に位置を高め、貢献を出来るのではないかと考えております。

6. 瀬戸田町と周辺の架橋計画

樺本：はい、ありがとうございます。会場の皆様方、瀬戸田町がどこにあるのか御存知と思います。まあ、そうは言いましても、私共の大学の学生も来ておりまして、知らない人がおるかもしれません。ちょっと御案内申し上げます。先程の安芸防予Qルート構想の図をちょっと御覧いただきますと、一番右の上に尾道市がございまして、その沖に向島がございまして。ここにはもちろん尾道大橋がございまして。それから向島と因島の間に因島大橋がもう大分前にかかりました。因島と生口島がこの間かかりまして、生口大橋と言うんですか、この生口島がですね、瀬戸田町でございまして。で、瀬戸田町の一部は因島が一部ちょこっと、因島市の一部ちょこっとございまして、生口のちょっと左上に、高根島がございまして。これも瀬戸田町でございまして。それから生口島から、つまり瀬戸田町から左隣に大三島、これから愛媛県になりますが、多々羅大橋で、結構長いんでございまして、これが現在、建設中でございまして、平成10年には開通予定であります。それから、大三島から伯方島、これはすでに橋がございまして。伯方島から大島、これもすでに橋がございまして。で、問題は、大島から今治市の、来島海峡を渡る3つの橋をかけまして、北の方から来島第一、第二、第三大橋とありますが、これも平成10年にかかります。ですからあと問題は生口島と大三島の間の多々羅大橋と、大島と今治の来島大橋がかかれば、これも全部平成10年に出来上がることになっております。そうしますと尾道と今治が60kmで結ばれることになります。ただし通行料金が要りますけど。ついででございまして、呉の方から下の方へ島がいくつか並んでおりまして、下蒲刈、上蒲刈、この下蒲刈と呉とは調整がついて建設中で、一部もう足は出来上がってるんでしょうかね、それから一部橋ができておりまして、豊島とかそれからそのとなり、大崎下島、それから大崎上島まで橋がかかることになっております。安芸灘架橋、8つの橋があるはずでございまして。大崎上島と大崎下島の間の島が岡村島で、これは愛媛県なんですけれども、そこから大三島へとんとんと橋をかけりゃあ先程の尾道ー今治ルートへ達する訳でございまして、そういう事を考えますと、この辺は結構島がたくさんあって橋が出来たり致しますんで結構おもしろいところになるなと思います。その中心が瀬戸田町でございまして、和氣町長さんがその中心だということになる訳でございまして。ちょっとまあ解説も含めてこのへんも是非局長さんに御記憶をいただきたいということ

です。それじゃあ、少し北上いたしまして広島からというよりも日本開発銀行の広島支店長さんの岩城さんにひとつお願いを致します。

7. 広島の都市改造計画と中枢性の強化

岩城：日本開発銀行の岩城です。今日は、糠谷局長さんから、四全総の見直しということでお話を伺ったわけですが、ちょっと見方を変えて、広島市のあり方を考えてみたいと思います。と言いますのはやっぱり四全総で、東京一極集中をどういうふうに避けるかということが課題になってる訳ですので、ちょっとまとめきれないかもしれませんが、うちの銀行の若い人との議論をしてみましたんでお話ししたいと思います。問題の根底としては、やはりグレーター広島、この中四国の中でやっぱり広島ががんばらない



岩城 正之 氏

と、広島は大阪と福岡の間で埋没してしまうんじゃないか、そうすると松江とか岡山はもとより、松山もみんな中四国ということで簡単に片付けられてしまうということが問題のスタートです。広島をいかにクローズアップしてもらおうかということで、広島の中枢性についてちょっとたたき台をつくりましたが、いずれこの考えは私もちょっとお手伝いしている同友会のターゲット21委員会の方でもまとめてみたいと思っております。

御承知のとおり、前提として3つあると思うんですね、広島の都市というものを考えた場合。まず第一はここは人の住める土地が不足している。これは、同友会でも福岡とか仙台に私共勉強に行ってるんですけども、広島は土地が無いのが第一点で残念なところですね。ところがですね、第二点という点では、非常に経済ポテンシャルが高いこと。第2次産業を中心に、しかも公害のでない産業構造が高度化しているということが第二点でメリットに挙げられると思うんです。ただ第三点としてですね、住んでる人が、先程の糠谷局長の話がありましたように、時間的、空間的ゆとりを持っているかという、ちょっと、住環境が必ずしもよくないんじゃないかという3つの点からスタートを致しました。基本的にはどういうことかと言いますと、今の中区、東区、南区のですね、デルタ地帯にやはり高層の住宅を徹底的に建てる。当然それは建蔽率の問題とか、容積率の問題があるんですけども、ここに、もう一度ですね、広島市の都心部に人を戻すということでこれは単に住宅だけではなくて業務施設の問題、商業施設ももう一度そこで再構築するということで考え直したらどうかというのが結論です。

それなりの前提を見てもみますと、今、中区がここ5年間でだいたい1万2千人ぐらいの人が減っているんですね。この都心部の人口が減少するということは東京と同じですね。中区と南区が人が減っております。東区はだいたい横ばいですね。東京では東京の真ん中にある3区がもう人がいなくて困ってる。それから江東区とか墨田区が今後とも人がいなくなっていると共に、あと外国人の人が増えちゃって、まあちょっと行政上異和感

が出てくるというのが現状です。やはり広島の場合も、こういった中央3区での、一万五千人の人口が減ってるのをどうするか。それから高齢者の割合が非常に多くなってますね、やはりあの原爆でだめになった後、若い人が入ってきて、そのままずっと住んでいて、その方達がいいたい現在60才以上にはなっている訳です。そういった条件をどういうふうに考えるかということで、広島都市を改造してみたらどうかということです。それで、今、現実をみていきますと、温品バイパスの朝のラッシュ、可部とか熊野とか、それから黒瀬とか宮島方面に宅地開発がどんどん出来てきて朝の8時と夕方の6時になると、もう道路が一斉に混む訳ですね。僕はこれが全て問題の元凶じゃないかと思うんです。ですから、一部の皆さん方の中でも主張しておる方がいらっしゃいますけども、紙屋町・八丁堀界限に業務施設だけを持って来ると、どうしてもこの混雑はもっと激しくなると思うんです。例えば、広大な跡地に業務施設を持てきますと、どんどん朝夕の交通は混む一方です。その一方で言えば広電をはじめとする、公的な交通手段の会社にとっては、やはりプライベートの会社ですから株主に配当しなきゃいけないということもありまして大規模な投資が負担できない訳ですね。そういうことから考えると、山あいの谷沿いに、特に可部の方面とかですね、ああいったところに大規模な宅地を造成して、不動産会社をもうけさすよりも、むしろ徹底的に人口を都心に戻すということを考えたかどうかということです。

具体的に言いますと、だいたい50m×60mぐらいのワンブロックを考えます。だいたい3000㎡ぐらいですね、土地が。それで一等地を考えますと、土地の値段が100万円/㎡、坪じゃありません、100万円/㎡というのは相当高い土地です。この値段は平和大通りがそのくらいするんじゃないかと思えますけども、そのくらいの一等地を、まあ一つのブロックを3000㎡として、土地代、それからあと建設費が1㎡辺り25万円、まあこれはあの高層住宅建てますから、坪当たり100万円近くなると思うんですけれども、それで容積率を1000%、これは今の広島ダウンタウンの容積率が住宅地域で200%ぐらいと思えますけども、商業地域でせいぜい500~600ですか、基町のあそこが700か800ぐらい認められてると思うんですけれどもそれを一気に上げてですね、1000%までもってくる。そして、家を戸当りですね、まあこれはいろんなグレードがあると思えますけれども、少なくとも戸当り70㎡のマンション、うまくいくと100㎡のマンションを建てると、どのくらいの、分譲のマンションでできるかと言いますと、まあこれいろんなタイプがありますけれども、70㎡くらいでやりますと3000万円でペイラインできます。で、100㎡になると4000万円ぐらいになります。ですから、容積率を上げて、しかも建蔽率は3分の1におさえて、公開空地をたくさん設ける。しかも全部を住宅にすることなく例えば1階から3階では商業施設、4階と5階が例えばカルチャーセンターとか、ソフトウェアハウスとか、そういった業務用の施設までミックスして、だいたい30階建てぐらいの、10階から上は、住宅にするというふうな感じにしますと、100万円/㎡の土地でも100㎡のマンションが4000万円で買えます。

これは、私共計算してみました。ただ問題はですね、行政の当然壁がある訳ですけども、その3000㎡の土地がですね、実際にどのくらいこのダウンタウンにあるかという問題。それと、僕は現空港は絶対使いたいと思ってんですけども、現空港の実は高度制限というのがあるんですね。半径4 km以内に65 mですか60 m以上の、特に南北の進入路に関してはですね、高さ制限があるんですね。その30階建てぐらいのものは建てることできないんですけども、その範囲外で言うと、天満町とか鷹野橋あたりまでがちょっと30階が無理なんですけども、それ以外の大手町とか南区の方は大丈夫です。で、そういう土地利用をしていくとですね、一棟建てますと、だいたい住宅が200戸ぐらいマンションにとれる訳です。そこで4人家族とすると8000人が住めますね。で、今、広島市の年間の人口増加がだいたい8000人ぐらいなんです。ですから郊外にですね、もうギューギューバスに乗って行くよりも、同じ3000万円4000万円を出すならば、非常に快適な都心での都市生活ができるという可能性がある訳です。

そういったことができるというのは日本の中では広島だけじゃないのかなというふうには僕は思ってるんですね。といいますのは福岡にしろ仙台にしろ岡山にしろ土地が潤沢にあるとこなんです、比較的。それで日本の都市の中のみならず、恐らく世界の先進国の都市の中でこれほどまでに土地がない所に100万人も住んでいるというのは僕は広島だけじゃないのかなと。それならば21世紀に向けてですね、広島が一大実験場になる、つまり非常に高過密の都市というものを形成すると、比治山から太田川の放水路まで、歩こうと思えば30分くらいで歩ける訳ですね、30～40分。ですから広電さんにも別にそれ以上の設備投資をしてもらわなくても十分我々は自転車で行けるんじゃないかと、或いは歩いても行けるんじゃないかと。それで仙台市にあるように、地下に駐輪場をですね、徹底的につくる。そういったようなことを仙台ではやっている訳ですけども、そういったような都市の快適さというものがですね、これからは僕はここ広島でも可能になるんじゃないかなと。

一応これ計算してみたんですけども、問題は2つあります。行政の壁ですね。要するに容積率を1000%まで認めてくれるかどうか、これはあと道路の幅の広さとか斜線制限とかいろいろあるんですけどね、まあ平和大道り沿いぐらいの坪300万円ぐらいのところでやれば、大体出来るんですね。ただ問題は行政の壁と、もう1点は土地が果たしてあるかどうかということなんです。その3000㎡の土地を。これは例えば土地信託の例のように、或いは自分が放出したものは自分が区分所有して所有をとるとか、いろんな転換の方法があると思うんですが、まあ僕は広島というものはそういう一大実験をするに値するところではないか、単に30階建てのものをマンションだけで終るのではなくて行政施設、商業施設としてですね、しかも建蔽率が3分の1ですから、3分の2は公開空地で非常に広いところが縁として残るわけです。そういったようなことができればですね、何も遠くの熊野とかあの辺から来なくても皆さん豊かな、まさしく局長がおっしゃってますような空間と時間とをですね有効に生かす、3000万円でしたら所得のだい

たい5倍ということにもまあまあ当てはまる層もあるかと思いますが一つこれは僕はもうちょっと勉強していきたいというふうに思っております。

樫本：はい、ありがとうございます。まあ、広島がつぶれるようでは松江も松山も周辺皆だめだとかいうおはなしで、多分まあそうでしょうね。まあそれに、住宅の話で、一つやはり広島市が従来、地上も地下はもちろんのこと、あまりこう平面の2次元だけでしかものを考えて来なかったというのは、広島の一つの欠点であろうと思います。どの辺の高さまでとか、地下もどの程度とかいう議論は当然有り得るわけですが、多分、今の報告書がいつごろ出るんでしょうか？正式には……。

岩城：私のですか？

樫本：はい。

岩城：これはですね、この3月の終り頃にはまとめようかと思っているのですが…。

樫本：あちこち、あたりさわりがある話のようでございますんで（笑い）。まあこれは特に行政側にいろんな御提言ということに、逆になりますよね。市全体の発展あるいは地域全体の発展のために、行政はどこまで、どうして下さるのがいいという提言に、逆になるんじゃないか……。

岩城：僕はね、ちょっといいですか。

樫本：はい。

岩城：前提としてやっぱり、福岡も仙台もやっぱり、都市の交通体系というのはみなさんやっぱり悩んでおられるんですよね。朝の8時と夕方の6時に、例えば福岡で言えば天神に集中する、それから仙台だったら東一番丁に集中すると。やっぱりそれはみなさんが住んでいる場所と、業務施設が離れているところが問題になるわけですね。それならば、この土地の狭い広島が世界的に実験が出来るんじゃないか、むしろその、真ん中にもってくることによって、そうすると例えばエネルギーの総合的な利用とか、それからバスとか電車にも頼らないで、みなさんが自由に行ける範囲の、せいぜい紙屋町から半径2キロぐらいの感じですよ。そこにある程度の高度のものができればいいんじゃないかなというふうに、まず前提として都市交通が抜本的に、広島の場合は解決できないんじゃないかというのが前提にあっております。

櫟本：はい、ありがとうございます。

まあ地上もありますし地下も、これはまあ地下街でありますとか、地下鉄とかいうのでございますが、これも大論争にやがてなっていくきっかけをご提供いただいたと思います。それじゃあ最後になりましたが、一番北側でございますが、山陰合同銀行の会長さんでございまして、環日本海のいわば窓口として、そこで中国四国を統轄しようと、こういうことで1つお話を賜りたいと思います。

8. 環日本海経済圏と日本海国土軸

深野：山陰銀行の会長の深野でございます。私は今は松江に住んでいる身でございますけれども、昭和48年から50年まで、広島に勤務致しまして、ちょうどオイルショックのときの乗り切りはかなり苦心した経験を持っております。そういうことで、広島に対しては、限りない、何といひますか懐旧の情というか懐かしく大好きな街であります。その頃広島から山陰を見ていたのが、今度は山陰から広島を見るようになりますと、まあそういう意味では、両方を経験している立場があるかなというふうに思います。



深野 和夫 氏

さて、よく言い古されたことでありますけれども、みなさんは地図を逆さにしてご覧になったことがありますでしょうか？地図を逆さにしてご覧になりますと、大陸から見て、山陰地方というのは目と鼻の先一衣帯水と言っていい先でございます。昔は日本は、アメリカやヨーロッパとは交渉がなかったわけですから、アジア大陸、殊にアジア東部との関係においては、まさに日本の玄関であったわけでありました。現に、いまでも朝鮮半島の東側で物を投げ込みますと、リマン海流にのってちゃんと、出雲の、稲佐の浜に着くわけでございますと、ハングル文字をつけた、梱包の古びたもの、その他が常に流れついております。そうした地理的關係にあるわけでございます。まあ私は日本海というのは、おそらく我々の祖先にとっては池であったのではないかと、つまり、あれは日本の池だというふうに考えております。従って、環日本海経済圏というのは、政治情勢さえ許せば、わが国にとって非常に重要な意味をもっていることは歴史的経緯から見ても、当然なことではございましょう。昨今、やっとソ連をはじめとする体制の雪解けで対岸諸国との関係が急速に復活してきております。しかしながら、まだ、C I Sといいますが、旧ソ連は支払い決済機構といったものが壊滅しております。ルーブルは減価につぐ減価でございますので、支払決済体系がございせん。そこでどうしても物々交換になってしまうわけですが、物々交換になるとお互いに必要としている物資を持つ相手を見つけないければなりませんし、差額がある場合の決済とか、あるいは違約金の決済といったものが出来ないわけでありました。実はそれが現在ソ連国内における流通、物流の妨げにもなっておりますし、我々との間の経済交流にも、当面支障になっておるわけではござい

す。そういった点もありますし、さらに何と申しますか、生活の水準の相違も問題で境港でソ連の船員の連中が買っていくのは、一台5万円位の中古自動車でありますので、まあ1桁、生活が違うとお考えいただいていいわけでございます。だから、日本へ来て宿泊したり物を食べたり、交通費を使ったりすることが非常に難しい、そういった状況にあることを前提としながらも、我々としては、環日本海経済圏というものをやはり大事にしていかなければならないと思います。

そのとき、山陰地方というのは、先程申し上げましたように、日本の玄関であります。しかし日本の玄関であるということは境港なり、浜田だけでは何も出来ないわけで、玄関というのは奥座敷がある、正式の座敷があるから玄関であるのでありまして、その正式の座敷というのは広島であり、岡山であり、さらに海を越して松山であり、ということとございましょう。そういった、しっかりした経済圏というものをバックに持たない玄関というものは有り得ないわけでございます。我々山陰が玄関口を主張するのは決して山陰のためだけであると思われるで大変困るのでありまして、そうではなくて、沿海州あるいは北^{ほく}鮮、韓国、中国の東北三省に対する日本側の玄関だと思っていただきたいと思います。さらにそういう環日本海というのを考えますと、やはり日本海側にですね、それを受け入れる軸、山陰自動車道なり、日本海岸を貫く自動車道路がなければならないことも、これもわかりいただけたと思います。それは、21世紀に向けてのインフラでございましょう。単なる道路だけでなく、港湾の諸施設、あるいは空港、情報関係のテレポートとかですね、いろいろなものがそこに浮かび上がってくる。さらに言うならば、我々としては、広島ほどではないけれど25万ぐらいの都市が、ある程度間隔をおいて日本海沿岸に連なるという姿、あるいは、充実した大学、研究所、そういったものの存在がやはり、日本海国土軸の内容になっていくのではないかというふうに思います。

そういった東西の軸と、それと、南北横断道路、中国山間部を横断しての瀬戸内との連絡ということが、十字型になるわけでありましてね。今までは、先程からお話がありましたように、東西にだけ軸があって、横断道がなかったわけでありまして。だからすべてのものが流れてしまう。ものも人も金も情報も、すべて流れてしまう。それをやはり、基^こ盤^{ばん}目にして受けとめる組織が出来て初めて、中国地方というのは発展していくわけでありまして、中国山間部というものも、それによって開発されていくにまちがいないと思います。そもそも、みなさん御存知のように、中国山間部というのは今みたいな状況ではなくて、昔は、広島の開祖であります毛利元就が、吉田町ですね、その郡山城に、本拠があったわけですから。あそこら辺は、むしろ中国の、最も中国地方らしい土地だったのではないのでしょうか。そういう意味で、ああいったところの開発というものが非常に大事になってくる。しかしその開発にあたって気をつけなければならないのは、乱開発に陥らないで、中国5県が共同してどういうふうな開発をしていくか、あるところはリザーブし、あるところは開発し、ということでなければいけないと思います。ただし、

私は、すべて自然のまま放っておけばいいというふうには思いません。自然を守るためには、自然に手を加えなければいけないわけで、世界どこへ行っても、全くの自然のままというところは極めて少ないですね。すべてやはり、何らかの手を加えて、自然を自然らしく保存するということが行なわれなければならないのだろうと思っています。

しかし、いずれに致しましても、そういう意味で、日本海国土軸というのは、環日本海経済圏に対する日本側の窓口として、それから、表座敷あるいは奥座敷であります山陽側や四国との交流の重要な道路として、さらに、中国山間部を開発する手段として、非常に大事なものではないか、そのように思います。ちょっと例は重いのですが、アメリカで、アイゼンハワーとケネディーの時代に、南北のハイウェイができました。その南北のハイウェイができたことによって、はじめてアメリカの南部と北部は円滑なる統一ができた、つまり南北統一というのは、第2次世界大戦後のアイゼンハワーとケネディーの時代になってはじめてできたということが言われております。おそらく、時間的距離の短縮は、中国地方のあり方というのを大きく変化していくことはまちがいない、このように思っております。

9. 中四国の連携と五全総

深野：次に、四国との関連であります。実は、私は、さて四国ねというふうに思うわけですが、しかし考えてみると、四国と直接結ぶことによって、先程も話ができましたように、太平洋、瀬戸内、日本海と、ここを貫く非常に重要な、中国地方全体の一つの背骨ができる、これができないと、中国地方は通過地点になってしまうわけで、その意義は非常に大きいと思います。さらには、昔は、瀬戸内航路から日本海を経て北海道に行く、いわゆる北前線^{きたまえせん}が、日本の新幹線であったわけでございます。これは昔の日本の新幹線の復活でありましょう。それから私、ちょっと気がついてみましたら、非常に四国の人^{ひと}が山陰方面に来ておられる。漁業関係あるいは教育関係等で、活躍しておられるのであります。それは無理もないわけで、海がつながっているわけでありまして、先程申し上げました北前線^{きたまえせん}の伝統から見れば、山陰と四国とのつながりは非常に深いと私は思っております。私の幻の恋人がこういう歌を歌っております。

「熟田津に船乗りせんと月待てば

潮もかなひぬ 今は漕ぎいでな」

御存知かもしれませんが、額田王の歌でありまして、熟田津^{じきたつ}というのは、伊予の松山の近辺と聞いております。伊予の松山から船出しようと思ったら、潮もかなった、非常にいい条件になって、さあこれから出発しようということであり、今日のこのシンポジウム、あるいは、中四国の結合というのが、そういったすばらしさをもって船出することを私は期待しているわけであります。

最後に、五全総との関係であります。局長さんがおられて、非常に申しにくいわけですが、四全総のときには少し、中国も四国も勉強が足りなかったというふ

しゃってた気がするんですね。でまあ、第4架橋としてですね、先程、深野さんですかね、会長さんがおっしゃってましたが、まあ山陰と、浜田と広島が今結ばれましたですよ。広島―浜田の高速道路ができました。そしてまた、浜田から、広島から、今度今の直のですね、広島―松山ルートというのができれば、これは大変いいことじゃないかと思うんですね。しかもそして高知に結びましてね、そういうような1つの大きな、いわゆる今、助言者の方がおっしゃいましたが、南北の縦軸というのができる、横軸は今できている、できつつありますからね、というようなことが1つの提案と、それから先程おっしゃいましたような、3つの海と、日本海、瀬戸内海、太平洋と、こういう非常にすばらしい3つの海があると。それで、2つの山がありますね、中国山脈と四国山脈がありますね、その3つの海と2つの山いわゆる三海二山構想というのかしら、まあこれちょっと聞いたことあるんですが、それらを連携するようなことでですね、いわゆるその、まあこれも中国5県の県知事さんが集まった会だったかどうか分かりませんが、いわゆるリニアモーターカーのような形でぐるっと、回そうじゃないかと。あるいは今度、九州に向いて九州大分、下関山口を結んだ、いわゆる8の字ルート構想っていうのをですね、そういうような1つ何かが、まあリニアモーターカーはまだ早いですが、しかしその、中国と四国を結ぶ1つの大きな構想としてですね、私はそういうようなものが、今、助言者の方が言われたようなことで、いわゆる南北の連携づくりの1つになるんじゃないかと、このように思うわけであります。もう一点、先程、^{さつせんひろふく}札幌仙広福の話がでしたが、確かおっしゃるように、札幌は、北を向かってですね、いわゆる北極圏と言いますかしら、そういうようなシベリアの方に向かってますね。それから、仙台は東北のインテリジェントコスモス構想がございますね。中四国は全くないんですね、そういう意味じゃ。そういう面で五全総で何か入れていく必要があるんじゃないかな、このように思います。福岡あたりはやはり、アジアににらんだものが1つありますね、中四国はそういう意味で、何か1つにらんだ何かをやっていく必要がある。そういう意味で、この会は非常によかったんじゃないかなと私は思います。以上です。

12. Qルートの整備順位の考え方

樺本：はい、ありがとうございます。このQルート構想に関してでございます。ちょっと私の方から……。私もあの、正確に知らないんですが、Y構想とかいうのがあるそうでございます、Yの縦軸の縦はですね、広島市から今おっしゃいましたように、似島を経て江田島それから、能美島、倉橋、鹿島それから松山と、こういう縦の軸がYという字の縦の棒になるんじゃないかなと思います。まあ問題は今の、広島市から似島、江田島、まあ倉橋と能美、という縦の軸、これも私は非常にいい案だと思います。ですから、出来れば全部できればいいんですね。それから、札幌仙広福の話で、これはもう、ぜひいいアイデアがございましたら、おっしゃっていただければと思います。ええと、はい、それじゃあどうぞ。

竹内：ちょっと一言言わせて下さい。

樫本：あの、ちょっと所属とお名前を恐れ入りますが。

13. 広島イメージと顔

竹内：はい、広島の経済同友会の竹内と申します。局長さんがおっしゃいました、広島には顔がないとおっしゃったこと、これは私ども、日頃からいつもそのことを自戒しているんです。その中では、札幌・広島では、札幌というのは、北のいわば拠点で、北方から含めて、北方圏の交流拠点だという、はっきりしたイメージがあります。それから福岡も、これはまあ全九州をおさえて、東アジアに向かっての、守備圏にしているといったイメージがあります。仙台はまあ、青葉城ぐらいしか我々ないんですが、インテリジェントコスモスというのはまあ、今のところ言い出されただけの、実体はあまりないわけで、広島とあまり変わりがない。ただし東京あたりからこう、東海道新幹線その他でこう来ましても、広島で降りようという気がおきない、もう九州博多まで行くという、広島で途中下車するという気がおきないということも事実なんです。だけど私ども広島に住んでますと、広島はいいところだなと思うんですよね。私の知り合いが新潟の方に来て、ふいに広島に来て、「あー、日本でも冬でもこんなに穏やかないいところがあるのかな。」感に堪えたように言いました。それをもう少しスケールを大きくしますと、この前、ゴルバチョフさんが広島に来られたんです。日本に来たときにはぜひ広島に来たい、で、広島に来て最初に言葉が、あの原爆で世界の平和のメッカになりたいと願っている市民の街、ここに来たことで自分は感動をおぼえているとこう言ってくれたんですね。外国から見ますと、京都あたりがイメージにあって、東京と京都と、まあむしろ広島が東京と広島なんですね、外国に行っても知っているのは。という顔はあるわけです。実体としましてはまあいろいろなことがありまして、外国の留学生がずいぶん広島は多いんですね。国立大学で4番目ですか。それからいろんな企業、技術系が集積しているというのも、これもまあ、4都市の中では特別なんですけれども、そういった意味で、国内の平和なところはあんまり顔がない。ところが世界の平和にとっては顔がある。世界的な顔ということをもう一度考え直してみるとかなり資格があるんじゃないかと、広島は顔がない顔がないとみんなが言いますと、そこでそうなりますので、局長さんは顔がないとおっしゃらないように……（笑い）。そういうことをふりまかないようにして、また別な角度から、顔があるに違いないと、市民も一緒に考えていると、岩城さんの反対はうれしかったんですが、交通渋滞、団地をつくれれば交通渋滞が起きる、これはもう日本どこでも、世界でもそうだと思いますが、交通渋滞おきないためにはこちらに住居もかまえると、広島はそれがないと、思っておりましたんで、これはぜひ成功していただきたい。一言つけ加えまして、顔の問題を1つ申し上げました。

樺本：はい、ありがとうございます。特にお答えはいらないかと思います。おっしゃるとおりでございます。どうぞ、次の方、いらっしゃいませんか？御質問なり御意見なり、どうぞ。はい。

14. 高速道路整備によるストロー効果と地方拠点都市の重要性

松水：広島大学経済学部の松水と申します。今日のテーマで、中国・四国の連携ということで、先程の糠谷局長さんのお話、今日またパネルの方々のお話を聞いてますと、南北軸が非常に大切だという御指摘があったんですが、私も全くその通りだと思うんです。最近の例で言いますと、例えば広島と浜田の高速道路の開通で、南北の一部が開通したということなんですが、私たまたま家内が浜田にいるものですから、浜田の事情はよく入ってくるんですが、浜田の方の人の話ですと、高校生あたりも就職する際には広島へ就職すると。以前は広島というと遠くに、まあ山陽ということで、地元の浜田市内の工場なり、あるいはいろんな施設に就職していた人が、土日にかけて、高速道路を利用すればすぐ家に帰れるということで、従来は地元就職していた人たちがみんなその広島の方に出ていってしまって、あるいはスーパーの買い物なんかでも、高速道路を利用すれば、1時間半ちょっとで市内のスーパーに行けるということで、みな広島の方に人が出ていく。あるいはパートの方も皆さん、まわりのお店ではなくて、広島に近い方、あるいは千代田のインターチェンジのあたりにいろいろ工場等ができてはいるわけですが、そちらの方にどんどん出ていっておられるということで、高速道路が出来前から、多分、ストロー効果で、広島の方に人がとられるではないかという心配はなされていたんですが、ストローどころかバキューム効果ということで、人をどっと持って行ってしまった。で、やはり南北の軸がこれから何本もできると思うんですが、東西と南北の軸の結節点にはある程度の集積があるわけですが、南の端と北の端といいますか、そちら側にある程度の集積都市をつくらないと、この中国・四国の連携が成り立たないのではないかと、中心部に集まりすぎる、あるいは東西に引っぱられてしまうということになるのではないかという気がするんですが、まあ幸い、北の方では会長さんがしっかりしておられますので、環日本海経済圏ということで引っぱっていただけたらと思うんですが、どうもその南北軸を考える際には、山陽、まあ瀬戸内海沿岸よりはむしろ山陰側と太平洋側、まあ太平洋側では高知県知事さんががんばっておられると思いますが、今まであまり我々も議論することがなかったんですが、山陰側と太平洋側でもっと力をつけていただけるような援助をしないといけないのではないかと。先程、樺本先生が、広島が先に手をつけるべきではないとおっしゃったんですが、まさにそういう観点からは島根とか鳥取とか、あるいは高知県の方からだんだん活性化していくような策を考えないといけないのではないかと、その点についてちょっとお考えを……。

樺本：どなたに？

松水：えっと、どなたでも結構です。

樫本：いや、だれか一人決めて下さい。

松水：それじゃあ、糠谷局長さん、あの。

樫本：すいません、それじゃあちょっと深野さん。

深野：ちょっとコメントを最初に。

樫本：はい。

深野：今、松水先生から御指摘があったのはその通りでございまして、浜田―広島間の高速道路開通によって、第1次的な影響としては、広島へ非常に強いストロー効果となっていることも事実でございます。殊に、流通業の関係が大きいですね。何しろ松江―浜田間が2時間以上3時間近くかかるわけでして、一方で広島―浜田間が1時間20分ということになるとこれは太刀打ちができない。そういうことから山陰自動車道をぜひ早く完成させていただかないとどうにもならないということでございます。ただ人の問題については、これはもう前から私どもの銀行でも、浜田・益田方面から人材がとりにくい、みんな広島に吸引されているわけでありまして、今に始まった現象ではございません。それと、浜田の人とお話しますと、一番大きな効果はやはり意識革新、浜田は今まで孤島であったのが、中国なり、日本の舞台に出てきたという感じでの意識革新が非常に強いわけです。港の5万トンバースの建設、あるいは流通団地の建設、それから国際短期大学の設置、それからまあゴルフ場といったものを含めて活気づいてきていることも事実でございます。ただ少し手が遅いという感じはいたしますけれども、これがいい刺激になって発展してくれることを私はやっぱり願っております。しかし今の松水先生のこの話はその通りで、我々としては、肝に銘じて考えなきゃいかんと、このように思います。

樫本：局長さん、一つ……。

糠谷：お答えになるかどうかわかりませんが、私は事実関係としては全くおっしゃる通りだと思うんですけども、今、深野会長さんがおっしゃいましたように、やはり、高速道路ができる、それから今度は空港でもできるわけでございますから、一時的な影響として、そういうストロー効果でなく、もうバキュームだよというようなことかもしれないけれども、やはりそういう動きの中でやっぱり新しいものを見つけてい

くというふうに考えるよりこれはもうしょうがない。しょうがないと言うとちょっと言葉がすぎるかもしれませんが。それからやはり、確かに鳥取県、島根県とこうあって、山陰で一番難しいのはやはり浜田、益田の方と、それから鳥取でいえばむしろ鳥取市の方だと思っております、まあまあ、松江・米子のあたりは、県をはさんで大きな都市が2つあって、高速道路も早くつながるということですから、何となくいろんな絵がかきやすいのかなと思ってんですけども、やっぱり島根県というのは東西に長いわけですから、それはまあ、ある意味では広島とのつながりの中でというのが過渡的にあってもよいと思いますし、それから鳥取の方でございましてこれはある意味では、もう鳥取は関西から山陰の入口という中で位置づけをしていくということかもしれないということで、島根で全部松江に浜田、益田もいかなきゃいかんというものでもないというふうに考えていけないといけないのではないかなと思っております、これは若干言いすぎかもしれませんが、そのような感じをもっております。

樺本：はい、ありがとうございます。今の問題は大変重要な問題で、先程局長さんのお声の中にもちょっと出た話ですが、この間も、経済同友会が、札仙広福を、地方の中核都市を大事にせよという御提言をなさっていました。従来の国の話では、農山村も含めて全部の地域がレベルアップするというのが一番いいと、これはまあ言うまでもないんですが、そうはいっても、限りある所得や資源を、広く薄くばらまいたらですね、結局地方はどこにも魅力がなくてみんな東京に集まってしまうというのを加速したという側面もあるんじゃないでしょうかね。ですから、今度、地方中核都市の整備などの法律が出てまいりましたが、広く薄く、結局どこも、大して上がらない、東京がますます相対的に上がっちゃうというのをやめようというんで、お金をまとめて使おうというのが国の政策じゃないかと思うんですね。けれどもまだ札仙広福の重要性まで国のレベルでいっておりません。特に中核都市という単語が一時、国土庁で消えていまして、大きな集積をもつ中核都市という言葉で、中核都市を位置づけていた時期もありまして、中核都市をある意味で殺していた時期もございまして。札仙広福はほうっておいても発展するというんで、ほうっとけみたいな形になっていました。けれどもそれでいいのかなと思うんですね。やはり多極分散だとか言って、東京の機能を多少なりとも受けるような機能をもっている都市といいますと、地方じゃ札仙広福ぐらいなもんですよ。大きな機能を受けようと思うと、それを広く薄くじゃ結局だめだという視点が今回、特に同友会で出たんだろうというふうに思います。だから、地方の中の一極集中というのはありますけれども、しかしそうはいいいながら、中核都市の一極集中というのを東京集中という前提の中で考えないと、もし広島がなかりせば、浜田の人は直接東京に行かざるを得ないと、どっちがいいかというともまあ、すぐ近くの広島にお見えになる方がいいんじゃないかと私は思いますけどもね。まあここはいろいろご意見があるところだと思います。もう一人ぐらいご意見を賜りましょうか。どうぞ、はい。

15. 文化・教育面での中四国の連携

^{たがしら}田頭：広島銀行の田頭と申します。今回のテーマが中四国の連携ということで、一体化ということが1つのテーマだと思うんですが、今までの議論でどちらかというとまあ、経済的な面での一体感ということが重視される、議論の中心だったと思うんですけども、これからはゆとりの時代ですから、文化的な面での一体感というのも、中四国で考えられないかなと思うんです。それでまあ、私自身がサッカーが好きなものですから、去年、例えばアジアカップ日本が優勝して、広島のスタジアムに5万人も人が集まったと。これも1つの文化じゃないかと思うわけなんです、それで文化の1つとしてスポーツ文化ということを見ると、例えば、九州には九州一周駅伝とかですね。北海道ではツールド北海道ということで、北海道中を自転車で走り回ると。そういう面では広島はまあ、サッカーでサンフレッチェというのができましたし、また、愛媛県では南宇和高校というのが高校サッカーでは非常に強豪だと。昨年度の高校総体では徳島市立高校というのが優勝されたそうなんです、四国でもサッカーが熱心ですし、また山陰でも出雲ドームというのができて、冬場でもスポーツができるという環境が整っていると。そういう面では、瀬戸田町さんもベルカントホールという、あれも文化を中心として町民の一体感をつくりという試みだったと思うんですけども、そういう面で、中四国に文化的な一体感をつくるという面です、まあサッカーでもいいんですけども、そういったスポーツ文化とか、そういった面で一体感というのを出せないかなと。その1つの手段としてサッカーというのを、何か拠点都市でフランチャイドつくってゲームをすとかですね、そういったことを試みできないかなと思うんですけども、そういった文化的な一体感を含めてもしご意見がいただければと。

樫本：どなたに？

田頭：あの、できれば田中社長さんに……。

樫本：田中社長さん、お願いします。

田中：どうもありがとうございました。今ご紹介いただきましたように、愛媛県のずっと南のですね、宇和島からまたもう1時間ばかり行きまして、高知県の御^{みじょう}荘のすぐとなりなんです、そこに南宇和高校という、サッカーでこの間、惜敗いたしました。準決勝ですかね、負けましたけど、3年前には、全国優勝したようなすごい高校があるわけでございます。よく覚えていただいて、広島の方にそんなに覚えていただき恐縮でございます。ありがとうございました。ちょっと私先程おれましてんですけども、今、松山の若い方にですね、何のために広島に行くのという、スキーに行くと言っ

ですね。どういうふうに行くんですかと聞いてみたら、フェリーに乗っていったりですね、それからいろいろな観光会社のセットしたものとかね、あの、四国の中にもスキー場があるのにどうして広島にいくのといったら、広島は非常に雪の量が多くてですね、しょっちゅう行くんだというようなことを言っておられました。ですから先程ちょっとふれましたように、やはりこの広島、それから山陰のですね、奥地のこのスキー場というのをですね、もう一回見直してみる必要があると思うんですね。ご案内のように、ゴルフというのは、お父さんだけおやりになるものですが、スキーはご家族ですね、おじいちゃんもおばあちゃんもお孫さんもみんなやれるような非常に素晴らしいスポーツですね。そういうわけで、これからやはり国民的なスポーツになりうる資格がありますので、お休みも増えることでございますし、やはりスポーツを通じてやっていくというのは非常に大事なことだと思います。

それから私は、自慢するようで恐縮なんですがございますけれども、松山がどうして魅力的なのかと申しますと、やはり非常に教育施設が整っていると思うんですね。今日、柏谷先生もお見えでございますけれども、愛媛大学をはじめとして、松山大学さんとか、それから東雲短大というのがありまして、これが四大となりましたし、聖カタリナ短大さんも四大になりましたしですね、非常に教育的な風土がありますというか、そんなことをいっちゃあれですけどもまあその、文化的な香りがするというような面もあると思うんですね。そういう意味ではやはり中国の方も松山に学ぶ人もあるだろうし、また我々がこの広島に非常になじみが深いというのはですね、やはり広島大学の存在が非常に大きいと思うんですね。先生、ごまするわけではございません。

樫本：ありがとうございます。

田中：やはりあの、四国からですね、広島大学に学んでいる人は昔から広島文理大時代からもずいぶん多いですね。そういうわけですからやはり両方がいい意味での競争、共存といいますか、競争と共存といいますか、教育なんかもっとやっぱり、いい先生を引っばって行ってですね、若い人たちにとって魅力的な大学をつくっていくということがですね、やはり中四国の発展のために私は非常に大事なことはないかと思っておりますね。今でも相当完備しているとは思いますが、まだまだですね、ほしい学部もあるわけなんですよ。ですからやはりそういうものを補っていくということが、非常に教育の面でも大事になるんじゃないかな、特にこれから、オーバーに言いますと、日本人には非常に世界的な期待が高まっているわけがございますし、人材の育成とか教育とかいうことはもう日本にとって最も大事なことになるわけです。そういう意味では、広島に行ったら日本一の大学があるとかですね、松山に行ったら優秀な、素晴らしい専門の学部があるといったことは、やはり日本中から優秀な若者が駆け参じてくるわけですから、大変、都市の魅力を増すためにも重要なことではないかと思いますが、そんなこと

でよろしいでしょうか？広島銀行さん、どうも。

櫛本：はい、ありがとうございます。広島大学へちょっとリファーされましたんで、申し上げますが、広島大学は、学部数でいいますと11の学部があるんですが、国立で一番多い学部をもってますのは、北海道大学で12あります。それよりも1つ少ないんですが、でも、11といえますとそれ意外ありませんで、東北大学、東京大学なんてのも10学部でございますからね。で、京大は9つの学部しかありませんから、けっこう広島大学は学部数でいうと多い。ということはほとんどあらゆる専門家がいますということでございます。それからもうすぐ入学試験がありますが、あの定員数でいいますと、国立大学では東京大学が一番多いんですが、2番目に広島大学が多いんです。大大学なんです。量は。いや急いでつけ加えなきゃいけません、質も大変よろしい大学でございますんで1つご期待いただきたいと思います。あの、ベルカントホールということになりますとね、和氣町長さん、やはり文化の中心的なところがございまして、まあその辺の話をちょっと和氣町長さん、お願いできますか。

16. ベルカントホールを中心とした瀬戸田町の試み

和氣：今、御紹介になりましたように私の町にベルカントホールという音楽ホールをつくっております。非常に高質の音を要求してつくった訳なんですけれども、全国各地からホールの見学にお見えになります。何故いいホールが出来たのかということですが、普通ですと、我々行政でありますので、最初にまず予算ありきで、予算の範囲内で建築設計や、そこに出来た空間へ音響設計をする。こういうのが普通であります。私の方では、ベルカントホールは、立派なのをつくろうと思ってつくったんじゃないんです。出来たのがベルカントホールだったんですけれども。設計グループが、ホールの性格はどうしますかと、こういう質問がございまして、まあ、何でもつかえる多目的がいいだろうといいましたら即座にですね、そりゃあ町長、だめだと。多目的は無目的になるから。使うのは多目的でいいからホールの性格は明確にして下さい、そういうことで、まあ、田舎の島でお芝居ばかりという訳にはいかんだろうからということで、ほいじゃあ音楽ホールにしよう。ただ、当時、私の方より2年ぐらい前、宮城県知事本間さんがつくられたパッサールホールというのが有名でありましたので、よし、それじゃあ音楽ホールにしよう。そのかわりパッサールに負けんやつをつくってくれ、こういうことを言った訳です。そうしますと、まず私の方では音響設計が理想の空間を描いた訳です。そしてその空間を建築設計が実現したと。その代わりお金は要るだけ要ったと。というようなことで出来た訳ですが。まあ幸いに、非常にいいホールということで、今や国際的な知名度を得ておりまして、先般もヨーロッパのピアニストが参りまして申しますのに、今ヨーロッパのアーティストで日本へ行ったら是非、演奏したいホールが5つあるそうです。その中の1つに我がベルカントホールが含まれておるということで、してやったり

とまあほくそ笑んでおる訳ですが。

私は、先程、豊かな空間づくりという、ゆとりの空間というお話がありましたが、このベルカントホールをつくってよかったなと思ったのがですね、昨年、私の方で石井好子さんが来て毎年パリ祭というのをやっております。で、福山の方から2〜30名御婦人がおいでになった訳です。そしてリサイタルを聴いて、あと私の方にもう1つありますサンセットビーチという海水浴場のグラウンドで野外大バーベキュー大会という交流会をやる訳なんです。それに参加して、夜9時半ごろ橋を渡って夜の国道を通過して福山まで帰られた訳です。あと話を聞きましたらですね、今日はとてもよかったと、そしてあのすばらしい余韻を家の玄関まで持ち続けることができた、こういうふうな話があったということの後で聞きました。私は地方の文化施設というのはまさにこの役割だなあと、都会でどんなすばらしい演奏を聴いてもひとたび外にれば喧騒な社会に呼び戻される訳ですから、余韻なんてものはせいぜい玄関を出る間の数分しかない訳です。ところが一時間もその上も素晴らしい音楽会の余韻を家の中まで持ち込むことが出来たということで、私は、地方の文化施設というものの果たすべき役割は、ここにあるなあという感じが実はしておりまして、それ以来、私は、私の方にお見えになる方に、造る時には思い切って、自信をもっていいのをつくりなさいと、それがまさに地方のこれからの使命ではないかというふうなことを申し上げておる訳ですけれども。あの前談でちょっと申し上げました中で、集積された都市機能を持つ地域とその周辺地域がうまく相互補完をしようというのは、実はこういうところにもひとつ大きな連携のしかたがあるんじゃないかと、こんなようなことを感じておる昨今です。

樫本：ありがとうございます。和氣町長さん、いくらベルカントが立派でもですね、外国から或いは国内からお呼びするのは大変コストがかかる訳で、しかも大会場ではありませんのでね、収入と支出を単独でやりますと、当然赤字だと思うんですね。そうするといろんな連携をなさっているというふうなお話も聞きましたが、その辺のお話をちょっと賜って……。

和氣：これはもう、とんとんなら大成功でして、まず99%赤字でございます。年度当初から赤字予算をもたしてやってるんですけども、まあ、お陰でいい内容のイベントをやりますので、一つには情報発進をいたしまして、マスコミの格好の素材になるということが一つあります。そういう意味でまあ、赤字というのは、パブリシティに換算すればはるかに、それ以上のものをもっておる訳ですから、これはまあ問題にしない訳ですが、ただ1つ、今、私の方はそういうかたちでやっておりますけれども、全国各地に出来ておりますホールが、果たして赤字を出しながら演奏家をよぶということがどのホールでもできるかどうかということはちょっと疑問な点があります。特に住民とか議会の圧力等がありますと、なかなかこれは出来難いものです。まあそれで私は、どこでも比較

のみやすく演奏会ができるようにするためにということで、全国のホールを持ってある自治体に向けましてホールのネットワークをつくろうじゃないかと。そしてこのホールのネットワークがお互いにプログラムをまわし合ったり共同でアーティストを呼んだり、そういうことをすれば、うんとコストが安くつきゃあしないかといったようなことで、このホールのネットワークというのを全国組織でつくっております。まだ加盟の数は10ホールぐらいで少ないんですけども、幸いに自治省の方で補助制度の方をつくっていただきまして、かなり有効に運営が出来るようになっておりまして、まあ、この辺を軸にこれからホールの有効活用をうんと図っていただければいいなあというふうに思っております。

樺本：はい、ありがとうございます。それじゃあ一応、御質問のほうにこれだけにさせていただきますまして、第2ラウンドということになりますが、今度は又、順番を逆にいたしまして、深野会長さんの方から、ひとつ第2ラウンドのお話を賜りたいと思います。10分弱くらいでお願い致します。

17. 東京一極集中にみられる限界と地方への期待

深野：はい。だいたい、皆さんのお話、その他をうけ賜りながら、お話しなきゃならないことは、申し上げたような気もする訳でございますけれども、あの、やはり先程からお話が出ていました、東京への一極集中の問題について、この間も国土庁が監修してらっしゃる雑誌での座談会の中で、あれは非常に世界的な価値生産の場所であって、一極集中を議論すること自体、多少問題があるんじゃないかというような御意見が出ていたのを覚えております。私も、そういう面もあるかと思うんですけども、それよりも東京への一極集中がもう限界にきていて破綻するのではないかと、一極集中を続けたくても、やっていけなくなる時期がもう来てるのではないかと、そちらの方を感じております。例えば住居の問題にしろ交通の問題にしろ、あれは、日本人があれだけの訓練をしているから何とかできるのであって、とても、外国から来た人は目を回して、よくこれで事故が起こらないものだというふうに感心しておるようでございます。そういったものを考えました場合、やはり地方への分散というのは、今後とも是非すすめて頂きたいと思う訳で、ことに先程からお話が出ていますように教育の問題ですが、週刊誌等によりますと、東京の大学の中で内容よりも評判が上がってるところも多いけれど、実際的には地方にある大学の方が質的に充実していると、そういう判定を下しておる訳です。

私が拝見しても、ごまをする訳じゃありませんが広島大学に行かれた方が非常によく努力もしてらっしゃるし、スタッフも充実しておられてですね、何も、むりして東京に行って、樺本さんのお話じゃありませんが、新宿のバーのマダムを数名養うようなことをしなくてもすむのではないかと、このように思います。ただそれには前提があつてですね、これは、日本の各大学とも、いろいろな今までのしきたりを改めて、いっそう充

実させていただくということが必要ではないかと思います。海外からくる連中は勉強をし、資格をとりにくる訳なんですありますが、日本の学生はどうも、受験制度が悪いせいか、大学へ入ったら力尽きたりという連中もかなりおる訳でございまして、それでは具合が悪い。きのうも話をしましたら、中学、高校で私立の中には、カリキュラムを全然変えてしまい受ける大学等で、試験に出ない科目は数学でも何でもオミットしてしまう。2年の途中ぐらいからオミットして重点を他にあてるということではですね、これは何の為のカリキュラムが分かりませんし、それから、最近の外国語で英語を一週間に中学で3時間だったら、そんなものは、覚えてる暇なんかない訳でありまして、少しそういう点で日本の教育制度全体が再検討の時期に入ってるのではないか、これは教育制度だけでありませんで、いろんな問題が今、変革の時期にあって自分を顧みず人を申し上げるようで誠に申し訳けないんですけども、そういう意味で一層の充実をはかっていただき、先程もお話しができましたように、学生を吸引していただくことを心からお願いいたしたいと思います。

樺本：ありがとうございます。三全総でしたっけねえ、東京集中が悪いなら札幌広福集中も悪いと。従って札幌広福なんかも、東京と同じように新設の大学は認めないとかいうのが出ましたですねえ。あれちょっと失敗だったと思いますねえ。東京の大学を地方に出そうとする時に、札幌広福も大学をつくっちゃいかんよという三全総は、あれはまずい政策で、じゃあ東京の大学が札幌広福でない所へ行けと、例えばさっきの浜田へ行けといたって多分行かんでしょうねえ。広島ならまあまあ行こうかみたいになりましょうけどねえ。まあしかし、糠谷さんは四全総の方の責任者でございます。それはなくなりましたんですがねえ。その辺のお話をちょっとしていただきたい。

糠谷：四全総ではそれは直しましたんで。

樺本：私の表現でまあまあ、よろしいですか。

糠谷：ええ、3全総の時はブロック中心都市などについてはちょっと加減しようよというか抑制しようよというそういう主旨のものになってたんですね。

樺本：そうですね。いうこともございまして広島も市立大学を当時からつくりたかったんですが、それで文部省へ行ったら、三全総に書いてある、これはダメだとはじめから門前払いをくったわけですが、四全総になって今の市立大学ができるようになりまして、市立大学も平成6年の4月から発足の予定でございます。ありがとうございます。岩城支店長さん第2ラウンドでございますが、ひとつよろしく願います。

18. 成長する都市と衰退する地域

岩城：はい。中国地方っていうのは都市が49あるわけですね。それで私もいろんなところを見てるんですけども、やっぱり元気のある市っていうのはどういうものか、反対に元気がないのはどういうものかなということに関心があります。実はこの十年間で、人口がですね、5%以上中国地方で伸びている都市が5つあるんですね。これは当然県庁所在地及びその周辺の都市は除きます。当然、東広島市とか廿日市市が伸びてるのは当然ですが、そういう所はいれないで、5つだけなんですね。その一方で10%以上80年代に伸びている都市はないんですね。日本全国で30ぐらいあります。中国四国地方にはないですが。まあその中でも5%~10%伸びてるのが5つあります。岡山県の津山市、鳥取県の米子市、それから島根県の出雲市、広島県の三次市、それから山口県の防府市。ちょうどいい具合に各県1個ずつありますね、今、初めて気が付きましたけども。それらの都市が何故伸びてるかというと、当然防府あたりはマツダの自動車工場が昭和54年以降に出てるということでしょうけども、やはり僕が見てると中国縦貫道の影響がものすごく大きいですね。特に津山。津山というのは、人口が今9万人ぐらいまで今になりましたけれども、町の中を歩いてみると、城下町で、町の中は非常に、どうしようもないぐらい道路骨格なんかは悪いんですが、高速道路との関係でみると一つの町の中に高速道路のインターチェンジが2つあるんですね。これは全国の町の中でも非常に珍しいんです。だいたい道路公団がつくってくれないんですね、2つも。それを、頑張りまして2つつくったんですね。しかも東西にある訳です。しかも、街のダウンタウンとインターチェンジとの間にショッピングセンターをそれぞれ東西につくってる訳ですね。津山市は、工場の誘致にも熱心でありますし、これからも伸びていくと僕は思っております。それで、あの町の人口を見ますと、何故ああいうふうに伸びたかということ、やっぱり進出してくる企業が子供達の教育の場があるかどうかということをもものすごく関西の企業、東京の企業は気にする訳です。ですからまず、小学校、中学校、高等学校をどうするか、それから高専までつくった訳ですね。それで大学まであそこはあります。人口9万人のうち高校生以上の、高校生と短大生と大学生の足した数がですね、8千人います。8千人から9千人。それから、22才未満の人口の数が2万3千人。これすごいんですね。2万3千人っていうのに要するに、3人か4人に1人がですね、子供というか、20才未満といいましょうかねえ、そういう町なんですよ。音楽大学がありますね。1つ問題になったのは、今度作陽音楽大学がうまくいかないで倉敷に逃げてしまうんですが、まあいずれにせよ、町の中に楽器屋さんがある、バイオリンがズラズラズラッと並んでるような楽器屋さんが3つも4つもある訳ですね。まあそういったようなのが、中国地方にもある。

それじゃあ三次はどうか。三次の魅力っていうのはですね、インダストリーがこれから出ると思うんですけども、今のところは商業機能では非常に立派に機能してますね。

大手のスーパー等を入れないで地場で結構がんばってますね。それから県北の卸業に対する布陣がよく出来ているということで、僕も、三次は今後とも伸びると思うんです。ただ問題はですね、先程南北軸っていか横断軸といいたほうがいいかな。で、問題になるのはですね、先程、局長さんのお話にもありましたけれども、中山間^{ちゅうさんかん}の問題ってというのはこれはなかなか難しいんですね、活性化するっていうのは。ですから過疎地ということで、これは、僕は都会人の、広島に住んでるから、これは和氣町長さんに怒られるかもしれませんが、局長の話にもありましたように過疎地の人口を増やすというのは難しいので、やはり交流の場をですね、今後そういった中山間^{ちゅうさんかん}、あるいは過疎地、離島とかですね、というふうにもっていく他、中山間、過疎地の活性化っていうのは、ちょっと僕は難しんじゃないかなってふうに思ってますけどねえ。これはただ、我々都会に住んでる人間の論理でありまして、一方の町長さんから言わせれば別な考えがあると思うんですが。やはりこれからは、いかにウィークデイは仕事に従事して、要するに木曜日の夜とか金曜日の夜からウィークエンドにそういった楽しみを求める。自然を求めるという、そういった活動的なところで中山間^{ちゅうさんかん}とか過疎地の活性化っていうものが大きい使命感が出てくるのではないかと、いうふうに僕は見てるんですが。その一つの例が三次あたりに出来ればと考えています。どうもこれは都会人の論理ですね。ここで僕も又、ピシッと言えないんですけども、町長さんどうでしょうか。

樺本：ありがとうございます。今の岩城支店長さんのご質問を受けていただいて和氣町長さんお願いいたします。

19. 地域間交流の促進と意識改革

和氣：あの、私も岩城さんのおっしゃる都会人の論理じゃありません。これは現実です。その地方、とくにいなかと称するところから何故人が少なくなったとか、そこは極めて選択技の少ない産業職場しかないということなんですね。で、どんどん人間の意識が多様化してきますし、生活内容も同じくであります。で、やはり選択技の少ないところには人が残らないというのがこれは残念ながら現実だろうというふうに思います。ただ、我々地方の者にとりまして、特にこの中国四国という地区に住んでおる者にとりまして、非常に幸いなことは第1ラウンドで申し上げましたように、多様な文化、資源、それから風景を持っておる。これは第一級どころか超一級のものを素材として持っておるわけですから、私はその交流の場に提供するには極めて適切な地域であると思います。交流人口が多くなれば、当然そこにサービス業として新しい仕事生まれてくる訳ですから、選択技の数がふえてくる訳です。そういうことが定住人口を増やす要因になり、まあ逆に言えばそれしかないんじゃないかと。ですから、地域の環境や風俗の問題も若干懸念はありますがけれども、それはきちとした地域の佇まいをしておれば意外にそれは防げるものです。私の方で島ごと美術館と称しまして野外彫刻を設置しております。こ

れは全く無管理です。砂浜やら公園のようなところへもうボンとおいてあるだけなんです。今3年程経ちますけども一度も傷がつけられません。私の町はゴミの少ない町なんです。観光客が来られて、まあ、きれいだなあ、ゴミがないと言って下さいますけれども、やはりそういう雰囲気をもつ地域であれば、交流をすれば、人がやって来ているんな悪いことが起こるということをすぐ言いますけども、それは受け入れる方の側に問題があるんで、むしろきちっとしておれば、決してそういうことはないということですから、私は非常にプラス面の効用が大きいというふうに思っております。ですから私は、恵まれた自然環境やら、歴史文化資源を活かした、いわゆる交流の場をつくると。そして交流人口を増やすと。で、これは新しい職場を創設しますし、それから何よりも先程、意識改革のお話がちょっとございましたけれども、やはり外部から大勢の人がみられまして交流をいたしますと、地域の人間の意識がどんどん変わって参ります。間もなく新空港が本郷に出来ますけども、私は今、一つの新しいキャッチフレーズ「東京から2時間瀬戸田へ」ということを、まあ2時間よりももう少しかかるんですけども、東京から直接2時間で島へいけますよと、いうかたちで、それから人の量と頭脳の質とを、まあ空港が今度は質の方を呼ぶことができるということで大変期待をしておる訳ですけども、そういうかたちで交流の場として島を大いに活用したい、まあ、こんなことを考えております。

樺本：はい、ありがとうございます。それでは、田中社長さん、お願いいたします。

20. ゆとりと豊かさのある地域社会の形成

田中：私はただ今の問題、大変関心がありますので一言だけ述べさせていただきたいと思うんですが、開銀の岩城支店長さん、それから町長さんがおっしゃった通りですね、本当にそこは大事だと思うんですね。今、私は松山におりますけど、一時間かかりまして久万町という山の中にふれあい農園をかりましてね、南海放送さんがつくりましたふれあい農園なんです、そこにさつまいもや大根をつくりに行ってるんですよ。で、そこに行ってみるとですね、その地域の方々とふれあいがありますね。そしてそこでつくっている人達とのふれあいがある。で、もっと驚いたことはですね、往復2時間かかる訳ですけども、私日頃は、家内とほとんど対話がないんですけども、そのお百姓をしてる時はですね、往復2時間の間、いつも家内が何か言ってますから夫婦の会話も出来ましてですね、非常にこう家庭のコミュニケーションもうまくいくということで一石三鳥ぐらいになるんですね。で、私はその中で思いますことはね、今、どの店に行っても売れてるのは、かまが売れたりくわが売れたりですね、種ものが売れたり花が売れたりしてるんですね。ですからものをまいたり植えたり育てたりすることをみんな好きになってきてるんですよ。だんだん、そういうふうに国民が豊かなもの、ゆとりを求めてきているんですね。何がゆとりかということを皆さんがだんだん気付いてきた訳ですね。

あの本当に皆さんどうですか、したくてもないのにサラリーマンになってお腹に穴がいたりですね、血圧が上がったりするでしょう。本当に人間にとって一番幸せな仕事は農業なんです。誰にも干渉されず、いつも最初から終わりまで社長ですからね。そういう訳でねえ、農業をする機会があれば農業をしたいという人も国民の中には随分いらっしゃると思うんです。ですから、かねがね私は提唱申し上げておるんですけども、全国の農家ですね、過疎になった空き家になった農家、或いはおばあちゃんがお一人とかいう農家はですね、市町村に届け出をして登録をして、それを国土庁さんで全部まとめましてですね、私は北海道で百姓がしたい、私は四国の山の中でやりたいとか、私は山陰の日本海側でやりたいとかそれぞれの選択があると思うんです。何も生まれた所に帰る必要はないと思います。そういう訳で、全国にこういうのがありますよとか、こういう山間部でこういうおうちがあって隣りにおばあちゃんがいるけどあるいは別室が空いてますがとか、同居でもいいんですけど、そういうふうなやはり、この過疎の地をですね、活用してもっとたくさんの方がそこに行って仕事をする、或いは一生仕事をしなくても、先程支店長もおっしゃったように週休の時行って、やるとかですね、夏休みの時行ってやるとか、いろんな選択の方法があるんだと思いますが、そういう意味で、私はもっとこの過疎地の活用といいますか、そういうものを今度の五全総に是非もり込んでいただきたいというふうに考えております。

21. 空港を活用した地域間の連携

田中：それから、2回目といたしまして、是非申し上げておきたいと思いますのは、やはり中四国の最大のメリットは空港でありまして各県に空港があるなんてことは本当に有難いことだと思います。東京関八州には空港は一つでございましてあれだけの人口がありながら羽田空港だけという状況の中です。私達はずい分恵まれてると思うんです。空港の活用の仕方次第ではぐっと盛り上がってくる。でしかも岡山、広島、高松、松山というような4つの国際空港をどんどん活用していけば、これからの国際化にはいろんな対応ができると思うんです。それに東西軸、南北軸を結び付けていけば、中四国は国際化という面ではずい分表舞台に出てくる可能性があり得るというように私考えております。今、福岡にはアジア中の飛行機が集まってるような感じになってるんですね。これを福岡だけで持つのは非常にもったいない。これを是非、この第二国土軸を使うなり豊予海峡を使うなりして、四国の松山に持ってくる、さらに又松山から広島へ持ってくるとか、あるいは福岡から広島へ持ってきてそれを又、山陰へ持っていくとか、いろんな組み合わせがあると思うんです。要は、活用してないんじゃないんでしょうかね。企画力がないんじゃないんでしょうかね。

この間新聞見てましたら、日本経済新聞に^{しょうざんろう}木村尚三郎先生ですね、こういうことをおっしゃってましたね、これから日本は産業立国だけでなく新たに観光立国を提唱すべきであると。フランスやイタリアやスペインは年間4～5千万人の外国人観光客が来ている

のに、日本はわずか4百万人で10分の1であると。シンガポールは人口270万なのですね、今、人口の倍近い440〜450万人の観光客が入ってきているということを書いておりますですね。そういう意味ですね、先程からお話がありますように、この中四国の観光資源というのは無限であるんですね。例えば最近道後温泉が産業観光新聞で、雰囲気は日本一になったんですね。あの韓国の方なんか非常に温泉がお好きなんですね。そういう訳でこの間もお話してましたけども、非常に韓国によく行ってる方のお話では、今、韓国の方は日本の衛星テレビをものすごく見ておられるんですね。つい最近までは、おじいちゃんおばあちゃん達が衛星テレビを見ておった。ところが今、若い人が必死になって見ておる。それは何故かって言うんですね、新婚旅行とかビジネス旅行とかで日本に来てみたらですね、日本人ってずい分サービスがいいし、しつけが出来てるし、それからマナーがいいですしね、一生懸命やってる、昼も夜も一生懸命汗をかいて働いていると。我々が考えておったような日本人じゃないじゃないかと。これは今後、日本と仲良くしていかなければ本当に損だということを皆さん感じておられる。だから一生懸命BSテレビを見てですね、日本語の勉強をしておられるというお話ししておられたですね。それから私の友人が台湾にいるんですけども、台湾の友人が言うのですね、田中君ね、悪いけど東京や京都には何回も行ってもう行くところがないんだと。それなのに、どうしてもっと松山なんか売れ出さないんだということを彼、言っておりましたですね。そういう意味でまあ、私達は、今、住んでる所をもう一ぺん今言われた中四国という広場でとらえてみてですね、そして我々自身が評価していけば、ずい分余地があるような気がするんですね。

先程も言いましたけど、コンベンション産業なんかもそうだと思うんですね。コンベンションというのは企業は誘致できないけども人の誘致と交流の場ですから。しかも学会なんかの場合はですね、外国人の方は、たいがい奥様がいらっしゃる。ペアでお見えになる訳ですから、ご主人がコンベンションやとられる間、奥様方は観光とかですねスポーツとかおやりになられますし、又、会合が終わった後はですね、ご夫妻でおまわりになるとかですね、とにかく日本へ来られればですね、日本のいいところを見ていただけるのじゃないでしょうか。そういう人達がお帰りになったら必ず日本はすごいということをおっしゃるんじゃないんでしょうかねえ。私も去年、海外へ行きましたけれども、どこに行きましても、一度お金貯めたら日本へ行きたいという方が多いですね。それぐらい、日本ていうのはあこがれの土地なんですね、そういう意味でこの中四国は私は観光レジャーとしてもですね、世間に評価していただけるだけの価値があるというふうに考えておる訳でございます。

樺本：はい、ありがとうございます。最初の農業の話ですが、普通の産業は出るのも入るのも自由ですが、農業というのは出るのは自由だけど入るのはほとんど許されていない産業ですから、放っておいたってそりゃあ小さくなるのは当たり前みたいな産業に

なっています。おっしゃるように農業やりたい人が自由に入れるようなかたちになっていけばですね、農業っていうのは楽しい仕事ですよ、種まいてだんだん大きくなっていくんですからねえ。それを許さない法律がちょっとある。

空港もおっしゃる通りですね。瀬戸内海を狭むところでも松山空港も高松空港も2,500mの滑走路で、地方としては大きいですね。それから山口宇部空港も岡山空港も今2,000ですけども、共に2,500になることになっております。広島の新空港も2,500で、もう今年開港ですが、やがて3,000mになることになってます。それに山陰の方も鳥取県は2空港、鳥根県は3空港ですよ。石見ができ、隠岐ノ島も含めればですね。中国四国はものすごく空港の多いところです。ということでおっしゃる通りです。しかも空港の連繋ということもねえ、しばし話題になりますが、東京から広島にお見えになるのにしばしば切符がとれない。じゃあ松山空港まで来て、コミュータで飛んで来ようという時になかなか連絡がうまくいかんとかいう議論がある訳です。ありがとうございました。じゃあ、そろそろ時間ですが、糠谷局長さんに最後にお話しをして頂いて、締めさせていただきます。ひとつお願いいたします。

22. 今後の地域づくりと五全総への展開

糠谷：最後を締めるということではないんですけども第2ラウンドのパネラーの皆様のお話を伺いまして、私、大変、意を強くしたといいますか、通常こういう場で、定住人口はなかなか難しいから、まあこれからは交流人口で考えておきましょうよという話をしましたら、多分お前何を言っとるんだと、そんなことで計画・調整局長が務まると思うかと、まあ怒られることが普通でございますけれども、今日は、内心どう思っておられるかどうかあれでございますけれども、ご賛同いただきまして大変意を強くしたんでございますけれども、私、正直申し上げて過疎地、或いは中山間^{ちゅうざんかん}の山村、離島そういった交流の場としてしか生き残れないからという消極的な意味ではなくて、明らかにこれからの経済社会のトレンドから考えるとそういうニーズが増えてくるし、むしろ、私共というか、岩城さんもそういう感じでおっしゃったと思いますが、都会の人間からお願いして是非やってもらうような話だと、こう思ってるんですね。それで、私、時々、地方に来ました時に、これも思いつきなんですけれども、都会の人間、東京で生まれ東京で育つ、東京にしかふるさとは持たない子供達の為に、もう一つふるさとをつくってくれませんか、こういうお話をよくしてるんですけれども、どういうことかと言いますと私などの年齢ですとまだ、出身熊本でいなかにおりましたからあれですけど、私の子供などはもうふるさとはない訳で、東京がふるさとで、それでも年に一回ぐらいはどこかに行きたいなあという時に、これは何も出身の熊本でなくていい訳でして、どこか何かひかれるものがあるという所であれば、毎年行きたいなあと思うんですね。私、和氣町長さんの瀬戸田に、まだお邪魔したことがないんで是非お邪魔をさせていただきたいと思います。恐らく、又いききたいなあ、毎年いききたいなあと思うようなそういう町

づくりをされてる所だと思うんですね。大分県の湯布院、これは私、だいぶ前から縁がありましてあれなんですけども、20年前、40年代に行った時は、本当、何の変哲もない山の中の温泉地だったのが、今ああいうことになってる訳で、今、人が行きすぎて交流人口が多すぎてあれは反省の時期に入ってるんじゃないかと思うぐらいですけども。

うに思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

23. 新しい社会資本のあり方

樫本：はい、ありがとうございました。メモにお書きになっておられます在来型社会資本の概成がいせいと新しい社会資本の準備、これはどういうことでございますか。

糠谷：申し上げたことに関係があるんですけれども、高規格幹線道路でございますとか、高規格幹線道路を1万4千キロつくろうとか、下水道を普及率70%とか80%にしようとか、公園をどれぐらいつくろうとか、まあ今各省が言ってる目標がございますね、政府が言ってる、これは、おそらく今の430兆円の公共投資基本計画、それから2000年以降も経済がポシャってしまう訳じゃあございませんから、程々の投資が行なわれるということを考えれば、21世紀初頭、2010年なのか15年なのか分かりませんが、それまでにはもうだいたいのことが出来てしまう。100パーセントとはもちろんいきませんが、まあ考えてることの程々のことは出来ると。そうすると今からもうちょっと新しい社会資本整備のあり方というのを考えておくべきじゃないだろうか。こういう言い方をこの頃してございまして、430兆円という枠を2年半前に決めた訳ですけども、その時には430兆円のうち、415兆円が在来型の社会資本、今、いろいろ考えておる社会資本の整備で、で、残りの15兆円は弾力枠と言ってたんです。弾力枠、弾力的に使うという、これからの社会経済情勢の変化で必要となってくるようなものに使いましょうということで、私あの、それを作りましたときに、本当はそれを目玉のつもりで入れ込んでたんですけども、やっぱりトータルの議論が先行しますんで何となく忘れられているんですけども、そう言った、今考えてるようなことは、十年、二十年考えたら出来てしまうんで、もうちょっと戦略的にこれからどういうことをやっていかなきゃいかんかということについてのアイディアを出していこうじゃないかと、そういう意味で書いてる訳でございまして、恐らくそういうような、社会資本整備、国土づくりの投資といえますのは、考え出してから5年、10年なんてのはすぐに経つ訳でございますから、そういったことを考えていく時期ではないだろうか。こういうことです。

24. おわりに

樫本：はい、ありがとうございました。今の局長さんのお話を賜りまして、一応終わりにさせていただこうと思っております。基調講演の時から糠谷局長さんには、大変いいお話を賜りました。冒頭に申し上げましたように、四全総であまりこの地方がしっかり意見を言わなかったということもございまして、反省をしております。五全総では是非とも、この地方に国の目が届くようなかたちでご提言をしたいと考えております。今日、お話を賜りましたら、結構、局長さんの意図にそってものを我々考えようとはしている。ただしまだ、目玉になるようなものは充分出てないのは事実なんでございますが、

しかし考え方としては国のお話とあんまり間違ってたなというふうに感じている訳でございます。まだまだ五全総に向けてこの地方をもう一つピタッと、例えば北海道なら北の国際拠点として整備をすると言えばはっきりする訳であります、こういった格好のものがなかなか中国四国では出しにくいのは事実なんです。長々と30分も聞かなくちゃ分らんようなことじゃあどうにもしようがなかろうと思うんでございまして、はっきり分かりやすい話で国土構造上の地位と、それからそれに対応しますナショナルレベルでのプロジェクトですね、これ両方あいまって国の方のつまみ食いをして下さる材料にもなろうかと思うんで是非とも皆様方の御意見を賜りたいと存じております。なかなかこの中国四国っていうのはイメージがわきにくいところでございますんで、ひとつご協力いただきたい。

今日も、パネラーの方々、二つの松、松江と松山から、それから二つの山という訳にはいきませんが和氣町長さん、それから山口県側もいらっしゃればよかったかなと思うんですが、ちょっとご都合がございましてできなかったんですが、中国四国全体じゃあございません、西よりの方々にお集まりいただきました。もちろん東側を無視してるというのじゃあございませんで、バージョン1でございますから、2になったり3になったりということもしばしばありうることだろうと思います。しかしいずれにしましても五全総に向けて何も出さん訳にはいきませんし、たいへんあずってる所でございしますが、しかし今回、皆様からいいお話をたくさん賜りました。会場の方々からも御意見賜りました。これを契機にしてもっと考えて糠谷局長さん、うーん、この間行ったときにはろくなこと聞かなかったが、今聞いてみたらいいこと言っとるというのを次回は出せればなというふうに思ってる訳でございます。それでは、糠谷局長さん、たいへんありがとうございました。それからパネルの方々、大変貴重な御意見賜りましてありがとうございました。それにもまして会場の皆様方にお礼を申し上げます。やはり、この問題の重要性を御認識いただきまして、お忙しいところにもかかわらず、お集まりいただき、かつ最後までお聞きいただきました。最後までお聞きいただいたところに大変価値があるんでありまして、こういう方々が中国地方、中でも広島に多いということを目のあたりにさせていただきまして大変、心強い思いをしておるところでございます。皆様方と一緒に将来の五全総なり、まあその次の六全総、七全総とあるんでございましょうから、それに続けて国レベルに我々の地方をアピールして行って、国からもこの地方は大事なんだというふうに思っただくように努力したいと思います。今後とも、ひとつよろしくお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。